



あか さか

み え じ

赤坂宿 ~ 美江寺宿

約 8.7 km

歩き旅

中山道ぎふ17宿とは？

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁(約534km)に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県のみ濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

赤坂宿

江戸時代には旧杭瀬川のほとりに赤坂港が設けられ、水運の要衝として栄えた所です。赤坂港からはこの地域の名産である石灰のほか、米や木材などが伊勢湾を通り、桑名へと運ばれていきました。文久元年(1861)には和宮が本陣にお泊りになりましたが、その際に中山道沿いの空き家や空き地などに宿泊所を急増築した「お嫁入り普請」と呼ばれる建物が今も僅かに残っています。

Topics

るくがわ 呂久川と渡し

呂久の渡しは、赤坂宿と美江寺宿の間を流れる呂久川(現揖斐川)にかかる渡し場で天正8年(1580)に織田信長の子・信忠によって設けられました。安土桃山時代、織田信長が近江の安土城に居所を移したころから、美濃と京都の交通が頻繁となり、赤坂から美江寺、河渡、加納の新路線が栄え、呂久川にも渡し場が設けられたのです。これが江戸時代初期に整備された五街道のひとつである中山道となり、呂久の渡しもそれ以来、交通の要所となりました。呂久川は呂久の集落の西側を湾曲しながら流れていましたが、大正から昭和にかけての河川改修で直線化し、揖斐川として生まれ変わりました。現在の小簾紅園のある場所は、かつては呂久川の流れてあった場所です。

小簾紅園

落ちていく身と知りながらもみじ葉の人なつかしくこがれこそすれ
公武合体のため仁孝天皇の第8皇女和宮が徳川第14代将軍家茂公に嫁ぐため中山道を御降嫁の折、呂久川(現在の揖斐川)を御座船でお渡りになる際に色美しく紅葉しているもみじを一枝、舷に立てさせて玉簾の中から詠まれた歌です。この御渡船を記念し、呂久の地に記念碑建立の気運が高まり、昭和4年4月に小簾紅園が完成しました。

お嫁入り普請探訪館

皇女和宮が御降嫁の際、大垣藩が和宮一行の宿泊先として中山道沿いの空き家や空き地に54軒もの急増築をしました。これを「お嫁入り普請」といいます。表から見ると2階建て、裏から見ると平屋造りの「ばんこ」と呼ばれる特殊な構造の建物です。

美江神社・美江寺観音堂

境内には美江寺宿跡の石碑や宿場の解説板などがあります。観音堂のある場所が美江寺廃寺旧地です。中山道は美江神社の前で直角に折れていきます。

西に揖斐川、東に長良川が流れ、大雨が降ると川が氾濫し、大変な被害があったそうです。ところが養老3年ごろに元正天皇が伊賀国にあった千手観音を祀って寺院を建立し、名も美江寺に改めたところご利益からか川の氾濫が少なくなりました。その後、寺院を中心とした門前町として発展しますが、戦国時代に寺が焼かれ、千手観音は岐阜市に移され、まちも寂れましたが、寛永14年(1637)に中山道の宿場として制定されると賑わいが復活しました。

